

堀川開削410年をふりかえる 堀川をめぐる人びと

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

ハイカラな納屋橋を造った二人 栗田末松と中島彦作

納屋橋は大正2年(1913)にそれまでの木橋から鉄石混用アーチ橋に架け替えられた。その本工事を請け負ったのが栗田末松、今も使われている欄干の製造を請け負ったのが中島彦作である。

明治になり、名古屋は城下町から近代的な工業都市へと大きく変身した。訪れる人々は当時は市の外れであった名古屋駅から路面電車に乗り碁盤割の旧市街地へ入ってくる。その入口にあたるのが納屋橋だ。納屋橋を架け替えるにあたり、近代化した名古屋の玄関にふさわしい橋として架けられたのが大正2年に完成した橋である。今は「レトロな橋」と言われるが、当時の新聞は「ハイカラな橋」と表現している。今の橋は昭和56年(1981)に架け替えられたものだが、大正時代の橋の面影をしっかりと残している。



6万人の人が押し寄せた納屋橋開通式 大正2年(個人蔵)

栗田末松 本工事を請け負った栗田組

一代で東海地方有数のゼネコンに

万延元年(1860)に広幡村(現:岐阜県養老町)で誕生した。小規模な請負師を始め、時々失敗もしたがだんだんと事業を拡張していった。大正初期には数百人の作業員を指揮するまでの規模になり、各地で大規模な工事を請け負い施工するようになった。市内では納屋橋の他に景雲橋の新設や伝馬橋・枇杷島橋の架け替え、庄内用水元杵樋門や矢田川伏越(水路トンネル)の改築、名古屋専売支局の建築など、その頃の大規模土木工事や建築工事を軒並み手がけ大正時代に亡くなった。この地方有数のゼネコンを一代で築いたのである。また、大正4年に開業した石川鉄道(現:北陸鉄道石川線)建設にあたり出資し、鶴来駅(石川県白山市)前に彰徳碑が建てられている。

名古屋の名物男

『名古屋百人物評論』(大正4年刊)には、「余り学問はない男と思はれるが、併し多数の技術者を使って、いささかも遺憾なく事業を完成せしめた手腕は、どこかに偉いところがなくては出来ない事である……将来大事業家となるべき忍耐力を有している。……ともかく名古屋における名物男である」と書かれている。

栗田末松が施工した施設



工事中の矢作橋 大正2年頃



名古屋専売支局 大正4年(現:市民会館の場所)



枇杷島橋 大正2年



景雲橋 大正2年(全て個人蔵)

中島彦作 納屋橋の重厚な欄干と華麗な鈴蘭灯

鋳物の技術で頭角を現わす

現在の岐阜県海津市平田町で生まれ、明治24年(1891)の濃尾地震後に名古屋へ出て、鋳物工場に働いた。その後独立して今の金山駅南で中島鉄工所を開業し、明治の終わり頃には30人ほどの従業員を擁する名古屋有数の鉄工所となり、鋳物製の井戸ポンプや郵便ポストなどを作っていた。

納屋橋の架け替えで欄干などを請け負いみごとな欄干と鈴蘭灯を作ったが、採算を度外視した製法なので7,604円で請け負い数千円の赤字が出たという。4年後に鉄工所は閉鎖に追い込まれ、設備一式は東京の工場へ売却された。精魂を込めて作った鈴蘭灯は、大正7年(1918)に起きた米騒動で壊され無くなってしまった。その6年後、大正13年に彦作は56歳で死去した。しかし欄干は昭和56年(1981)の架け替えの時に修理して再利用され、今も納屋橋に残されている。

職人魂、何が何でも良いものを

彦作は、良い物を造ろうと銅器で有名な富山県高岡市から美術鋳物師を呼び寄せ、手間と技術が必要だが精密な製品ができる蠟型鋳造法で製造を行った。その結果大きな赤字を抱え、その後倒産してしまった。この職人魂がどんなに名古屋の人々に感銘を与えたのかは、中島彦作のとてつもない葬儀の行列を写した写真からも窺うことができる。



◀納屋橋欄干の銘板 ▲完成直前の納屋橋(鶴舞中央図書館蔵)
▼中島彦作氏の葬列 大正13年(個人蔵)

